

ノ時濕氣フカキハ、愚○山路主任按ズルニ、夏至ノ日輪ハ、我居ル所至テ近キ故ニ、萬物極暑ニ旱付ラレテ燥ナリ、冬至ノ日輪ハ、我居ル所ニ至テ遠キ故ニ、極寒ニ氷付ラレテ堅ナリ、然ルニ冬至ヨリ日輪漸我居所ニ近ヅキ、五月ノ節頃ニハ日輪ヲヨソ我頭上ニ近ヨル故ニ、萬物既ニ燥ント欲シテ、先蒸暑クシメ、スル、此時ヲ梅雨ト云フ、譬バ生木ヲ火ニ焙ルニ、マヅ濕氣霽レテ、後ニ燥ナリ、梅雨モ又カクノ如ク、日輪ノ火氣ニ照付ラレテ、地上ノ濕氣先霽ルトキナリ、乃梅雨ト名ヅケタルハ、梅ノ實黄バミ落ル比ナルニ因テ也、

〔日本歲時記四五〕此月淫雨ふる、これを梅雨つゆと名づく、又微雨ほろともかけり、梅雨の中肥土に芙蓉、石榴、櫻桃などの枝をゑらびてさすべしと、月令廣義に見えたり、此時黃土につゝ、じ、薔薇、水梔をさせば甚よく治、又貧家人功ともしき輩は、奴僕事を廢し、おこたりては、家事調がたし、梅雨久霖の中も、家僕をして薦をおみ、屣をつくらしむべし、薦は書籍器物食物等を晒し、新に栽たる草木菜蔬におほひ、塙屏を葺ゆへ、其功用廣し、又梅雨水を大瓶に貯置、茶を煎すれば、はなはだ美なりと、茶譜に見えたり、但日をへては飲べからず、又梅雨水にて癬疥を洗へば、そのあとなし、醬を作るに、これを用れば、熟しやすく、衣をあらふに、これを用れば、灰汁のごとしと、東垣が食物本草に見えたり、梅雨出入の説紛々として、一決し難し、埤雅には、閩人立夏の後、庚にあふ日を入梅とし、芒種の後、壬に當る日を出梅とす、神樞には、芒種の後、丙にあたる日を入梅とし、小暑の後、未にあたる日を出梅とす、又碎金錄には、芒種の後、壬に當る日を入梅とし、夏至の後、庚にあたる日を出梅とす、三元歸正には、芒種の後、丙の日に當るを入梅とすと云説、是にちかし、其時雨濕衣を班するに驗ありと見えたり、凡梅雨出入の期は、和漢ともにさまざまの説侍るなり、されどもその説合がたし、損軒嘗著微雨説いはく、陰陽之往來固有定期、然而天地之流行變化無窮、故